

自閉症児における先行子操作による自然な弁別の獲得

— 一気になる行動の軽減 —

Acquisition of natural discrimination by antecedent intervention in a child with autism

○ 氏家千恵美 松田幸恵 宮崎 眞
 UJIE Chiemi MATSUDA Sachie MIYAZAKI Makoto
 (岩手大学大学院 岩手大学大学院 岩手大学)
 Graduate School of Education, Iwate University

Key word : Autism Antecedent control Errorless leaning

1 目的: 発達障害児の中には何らかの理由で社会参加が制限されるなど, 本人の QOL の妨げとなる要因の一つになっている行動を示す人が少なくない [Sigaffoot et al., 2003]。このような問題に対して「積極的行動支援」(Positive Behavior Support [Koegel et al., 1996 以下 PBS と略す]) においては行動問題とその結果の随伴性に注目した研究が多いが, 近年目標となる行動に先立つ先行刺激に対する操作技法が試みられている (J.K.Luiselli et al., 2001)。

本研究では, 行動問題とは言えないが, 食べ物を扱う際, 時と場所に関わらず食べてしまうという気になる行動を持つ児童を対象に, 先行刺激の弁別の不全と仮定し, 無誤学習の考えを取入れ, 先行子操作によるその行動の軽減をはかることを目的とした。

2 方法

1) 対象児: 200X 年 10 月現在, A 養護学校に在籍する, 10 歳男児である。前年度同じく I 大学プレイルームにて「ホットケーキ作り」場面を利用したコミュニケーション指導に参加。調理時に食材を食べてしまうことや, 飲食時に他の人の食べ物に手を出してしまう様子が頻繁に見られた。絵と文字カードで「食べません」の指示をしても, 本児は復唱をしたがその言葉は「食べる」行動を抑制することはできなかった。「だめです」などの禁止の言語指示により興奮し部屋をとび出すこともあった。家庭においても, つまみ食いが頻発しているとの報告を受けている。2) 指導目標: 自分の食べ物と人の食べ物を適切に弁別し, 自分のおやつだけを食することができる。3) 指導期間: 200X 年 6 月から翌年 2 月の間に 32 セッション実施 4) 指導場所: I 大学プレイルーム (5m×8m) 5) 参加者および指導場面: 本児の他に主指導者, 観察記録者 2 名が参加。4 名がテーブルを中心に座りおやつを食べた。ま

たセッション(以下 S と略す)16 からは離れた場所にテーブルを設けおやつや道具の受け渡し場所としさらに一名の大人を配置した。6) 教材: 菓子, 小分け容器, トレイ, 皿, コップ, 他。7) 事例の研究デザイン: 基準変更デザインを採用。8) 手続き: 指導期 I は自他のものの弁別が明瞭なおやつ場面から自然な場面へスモールステップで先行刺激を変更した。指導期 II においてはより現実的な弁別を促すために多様な先行刺激の状況を設置した。また, 「これは誰々のね」「皆で食べようね」「あとでね」や, 食べそうになった時は「あっ」「ええ」などの言語指示で本児の指示従事行動の機能化を図った。9) 整理方法: 事象記録法を用いた。おやつ場面全体を観察対象とし標的行動のレベルを三つに区分し記録した。①食べ物に手を出さない(○), ②手を出す(△), ③食べる(×) 10) 記録の信頼性: 2 名の観察記録者間の一致率は $32/32 \times 100 = 100\%$ であった。

3 結果および考察: (Figure 1) [指導期 I] おやつが参加者各自の手の中にあり手を出せない状態から, S12 の皿の上までの間に手を出したのは S3 と S5 においてのみだけであった。[指導期 II] 手を出しやすい条件を増やした。S15, S21, S25 において菓子に手を出す, いずれも「あっ」などの声かけで手を戻し, 言語指示の機能化図られたようだ。[般化] ベースラインとほぼ同じ手続きでのホットケーキ作りでは, 一度もつまみ食いをせずに自分のおやつのみを食べ, 自他の弁別を維持することができた。また, 指導期 II からは「あとでね」などの言語指示に, 「はい」と応答する様子や, 本児が自発的に「あとでね」と言い行動を自己統制する様子が見られた。般化場面においても自己指示による行動調整が機能していた。

Fig. 1

